

かけがえのないもののために。

そとに鎮むものたちのために。

EVERY YEAR

0813

本年度中止

アジアポートフェスティバル in Kanmon

関門海峡花火大会

kanmon kaikyo Firework Festival

SHIMONOSEKI-SIDE

故郷を誇るすべての人へ。

私たちのふるさと下関は、かけがえのない海峡のまち。幾多の歴史が生まれ、豊かな文化と力強い産業を育んだこの街の動力の源にはいつも関門海峡がありました。私たちの街はこの海峡という大きな存在と向かい合い、時と空間を共有するなかで自らを鼓舞し、己を高めてきたのかもしれない。これからもこの地がある限り、私たちの生命はこの海峡のまちで連続します。毎年お盆の十三日、帰郷した人々が、この海峡のまちに生まれたことの、そしてこの海峡のまちに生きることの“誇り”を共にしながら、その真価を次代へと継承していく、この揺るぎない意思のもと、関門海峡花火大会は生まれました。

大会の歴史と概要

昭和60(1985)年、財団法人下関21世紀協会(現在は一般財団法人)によって始められました。昭和63(1988)年からは『アジアポートフェスティバル in KANMON 88 海峡花火大会』として、北九州市の門司区側からも花火が打ち上げられるようになり、2020年は下関では36回、両市合同では33回目の開催を予定していました。海を越え、県境を隔てて同一名称で開催される世界唯一の花火大会です。
※一日の人数としては、全国の花火大会で第2位



その起源は鎮魂の祈り。

この国の花火大会の起源について、かつて江戸を襲った疫病によって失われた多数のいのちの慰霊と、悪病退散祈願のために行われた水神祭だとする伝承があります。ただその由来がどこにあるとも確かなことは、古より人々は夜空を彩る花火に、それぞれの大切な人への祈りと鎮魂の思いを重ねあわせてきたということ。壇ノ浦に沈んだ平家が、幕末に散った志士たちが眠る場所、ここで日々を営み、それぞれの宿命を生きた、この場所を記憶するすべての眠れる魂に向けて、そしてまだ見ぬ未来の希望の魂に向けて、今を生きるわたしたちの意志と英知が、力強く、そして鮮やかに、遙かな彼岸へと続く関門の夜空に放たれます。

大会テーマ

- 下関側では2005年以降、毎年度時世を反映した大会テーマを設けています。
- 2005年: 火花散る。火花咲く。『紅白繡乱』 壇ノ浦、上空の合戦。
 - 2006年: 海の恵み 空に咲く。～喝采の夏 豊饒の海
 - 2007年: 二十年の祝祭。～海と空からの祝福
 - 2008年: 世界へ挑む者たちへ。～より高く、より遠くへ。
 - 2009年: 波乱の海から 希望の空へ。
 - 2010年: 夢が駆け抜けた海峡 ～継ぐ者たちよ、星空に舞え。
 - 2011年: 火の鳥、復活の空へ飛べ。
 - 2012年: 激流島、四百年の宿命。
 - 2013年: 新生の地。不変の天。
 - 2014年: いつか我が国へ。
 - 2015年: そして今を天上に刻め。
 - 2016年: 星空の翼、君が信じる夜明けへ。
 - 2017年: 永久の途上。～ふたつの街のひとつの海で。
 - 2018年: 明治元年、あの日の未来のその先へ。まだ見ぬ世界の原点へ。
 - 2019年: 令和元年、決断のエッフェル。

通年基本概要

大会名称	関門海峡花火大会
主催	海峡花火実行委員会(下関会場)
事務局	一般財団法人下関21世紀協会
開催日	毎年8月13日
開催会場	(下関側)あるかほ一と会場、海峡ゆめタワー前会場、カモンワーフ会場、唐戸市場前会場
打上げ時間	午後7時50分～午後8時40分
花火の内容	打上花火、水中花火、尺玉連発、1尺5寸玉、フェニックス 等※関門合計 15,000発(両岸各7,500発)
打上場所	合船2台(あるかほ一と会場前、岬之町埠頭前)、突堤
動員数	下関側45万人 門司側45万人 ※関門合計90万人 (2019年度主催者発表)



下関会場三大火火-1
一尺半玉

関門海峡花火大会のフィナーレを飾る下関が誇る渾身の巨大花火。その到達高度は450mに及び、およそ直径450mの広がりで見守ります。



下関会場三大火火-2
水中花火

会場前120mの沖を走るボートから投下し、沈みながら水中で開花した花火は轟音を響かせながら扇状に広がります。



下関会場三大火火-3
復興祈願花火フェニックス

2004年の新潟県中越地震からの復興と感謝のシンボルとして始まったフェニックス。下関の夜空に不死鳥が舞い上がります。

